『古代アメリカ』 12, 2009pp. 95-103

＜調査速報＞

古代アメリカの学術情報の普及

―高等学校世界史教科書問題、マスコミ報道の改善、研究成果の発信と還元―

青山　和夫（茨城大学人文学部）
吉田　栄人（東北大学大学院国際文化研究科）
坂井　正人（山形大学人文学部）
井上　幸孝（専修大学経営学部）
多々良　穣（東北学院榴ケ岡高等学校）

1. はじめに

日本社会において、世界の古代文明といえば、もっぱら西洋や日本とより密接な関係にあった旧大陸の「四大文明」を指し、その他の地域の古代文明を軽視する傾向がある。特にコロンブス以前のアメリカ大陸で盛衰した諸文明は、商業主義的な利益を優先するマスコミによって「謎と神秘の文明」というレッテルを貼られている。テレビ番組の視聴率、映画や一般書・雑誌の売り上げを稼ぐために、謎・不思議・神秘をおもしろおかしく強調して「歪められた」古代アメリカ文明観が捏造・再生産され、消費され続けている。特にテレビ番組の影響力が強い。

一方「謎と神秘の文明観」は、社会的要求の交差点として、多くの日本人が好んで消費してきたことも事実であろう。消費者の需要に応じて商品を提供する形で、「学問的な謎」ではなく「捏造された謎」を煽り立てるテレビ番組が繰り返し制作されてきた側面は見過ごせない。問題なのは、既に誤解であることが明白でありながら、番組制作に利用するという姿勢である。また、嘘・偽物と知りながら「謎と神秘の文明」を楽しむ視聴者も少なくない。例としてはいわゆる「マヤの水晶ドクロ」、マヤ長期暦の2012年12月完了に関連させた「終末予言」、ナスカの地上絵と「宇宙人」、架空の「アトランティス大陸」伝説などが挙げられよう。個々のテレビ番組は一過性であろうが、謎・不思議・神秘を誇張して繰り返し放送されれば、誤った古代文明観が定着してしまう。

今なお学術研究と一般社会のもつ知識の乖離は大きい。古代アメリカ学会の会員が次々と生み出す研究成果・学術情報がまだ十分に日本社会に普及しておらず、知の再生産が効果的に行われていない。その要因の一つとして、高等学校世界史教科書においてコロンブス以前のアメリカ大陸の記述が、質量共に極めて貧弱なことが挙げられよう［多々良2005］。歴史教育への貢献と研究成果の普及は、古代アメリカ学会と会員、そして全ての歴史研究者の重要な使命である。アメリカ大陸と旧大陸の古代文明を対等に位置付け、よりグローバルな「真の世界史」を構築してい

かなければならない［青山2008a, 2008b, 2009a, 2009b］。

2008年12月6日の古代アメリカ学会総会において、「学術情報の普及に関わる戦略検討ワーキンググループ（以下WG）」を役員会のもとに発足させ、教科書問題を含めた学術情報の普及戦略を検討することが決議された。青山和夫は、役員会の運営委員（研究担当）として、WGの座長に任命された。WGは、青山（メソアメリカ考古学・マヤ文明学）、吉田栄人（マヤ民族学）、坂井正人（アンデス考古学）、井上幸孝（アステカ史）という4人の大学教員に加えて、高等学校教諭の多々良穣（マヤ文明学）の計5名の会員によって構成されている。本稿の筆者5名は、2009年9月まで高等学校世界史教科書問題、マスコミ報道の改善・対応、研究成果の一般社会への発信と還元などについて、短期、中期、長期的展望に立って答申案を練り上げた。

本稿は、2009年6月20日に東北大学において開催されたWG研究会の研究発表・議論の要点にその後の知見を加えて修正加筆して、筆者らの意見を速報として報告・提言するものである[1]。本稿が、古代アメリカの研究成果・学術情報を日本社会により効果的に普及していく一つの手がかりとなり、「謎と神秘の古代アメリカ観」の脱構築にむけて活発な議論・活動が古代アメリカ学会の会員の間だけでなく、日本社会において広く行われていくことを強く期待したい。

2. 古代アメリカに関わる高等学校世界史教科書記述の問題

「世界四大文明」という珍奇な文明史観は、欧米には存在しない。これが日本で大々的に喧伝され始めたのは、1952年の高等学校世界史教科書であった。「文明とは何か」という問題を探求する上で、時代遅れの「四大文明」観の限界は明らかである。しかし、この文明史観は、学校教育だけでなく、マスコミ報道でも再生産され続けて、日本社会にすっかり定着している。旧大陸世界と交流することなく一次文明を独自に形成したメソアメリカ文明とアンデス文明の研究は、従来の「四大文明」・西洋中心的な文明史観ではない新しい歴史的知の構築に大きく貢献する。

中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領などの改善について」（平成20年1月）では、「我が国の歴史の大きな流れの理解のために、その背景となる世界の歴史の扱いを充実させる」と書かれている。そのためには、世界の古代文明の興りに関する学習を充実させることも重要である。「歴史」を自ら考え構築する力を涵養させようとする歴史教育において、コロンブス以前の南北アメリカ大陸の文化や歴史について適切な記述がなされていないのは問題といえよう。

高等学校世界史教科書には、誤った事実や不適切な記述が散見される。たとえば山川出版社『詳説世界史』では、79ページの「インディオ」、「インディアン」といった差別用語、「アメリカ大陸の文明はユーラシア大陸の文明との交流がほとんどなかった」ではなく「アメリカ大陸の文明はユーラシア大陸の文明との交流が全くなかった」、「オルメカ文明が前1000年ころまで」ではなく「オルメカ文明が前1200年ころまで」、同80ページの「4世紀ころから9世紀にかけてマヤの」ではなく「前6世紀から16世紀までマヤの」などが挙げられる。高校生の学習の負担増加を回避するためにも、教科書における古代アメリカの記述量の増加は今すぐには望めないものの、教科書会社と事前に交渉して正誤表や修正案を提案することは可能であろう。

高等学校世界史教科書において、コロンブス以前のアメリカ大陸の文明に関する記述が登場す

るのは、「諸地域世界の形成」における諸文明の成立について言及する時と、「ヨーロッパの拡大と大西洋世界」における新旧両大陸の関係について扱う時である。教科書会社独自の方針によって、双方を取り扱う場合もあれば、後者だけに限定している場合も存在する。しかし後者の記述・説明だけによる場合、そこに描かれるアメリカ大陸の諸文明はヨーロッパによって発見され植民地化された被征服者の文明として「世界史」の語りにおいては付随的なものになりがちである。

ヨーロッパ人が名付けた「インディオ」という呼称そのものが端的に示すように、アメリカ大陸の諸文明の多様性を無視し、それらを一括して扱う西洋中心的な見方は、日本の教育の場に広く行き渡っている。アメリカ大陸の多様性に富んだ諸文明を同一視・混同する「インカ・マヤ・アステカ」シンドローム［たとえば山川出版社『詳説世界史』79~80ページ］を形成・助長する上で中心的な役割を果たしてきたのが、西洋中心主義的な見方に基づいた世界史の教科書だといえる。しかしながら、高低差の激しいアンデス地帯で盛衰した先インカの諸文明は、たとえばナイル川流域の砂漠地帯において統一国家が生まれた古代エジプト文明と比べると極めて多様である。さらにメソアメリカの自然環境も極めて多様であり、大きな時期差・地域差を有する諸文明が共生し、政治的に統一されなかった。

高等学校世界史の教科書や副読本（図説）には、アメリカ大陸を侵略した西洋人が抱いたイメージに強く影響された記述がある。実際にはそれほど行われなかった「生け贄」が過度に強調されているのは、その典型的な事例といえよう［たとえば浜島書店『世界史詳覧』142ページ］。これは例えるならば、世界のいずれかの国の世界史の教科書において、日本の近世史に関して武士の切腹だけが過大に取り挙げられるとか、ヨーロッパ中世史で魔女狩りだけが大きく誇張されているようなものである。さらに「アステカ帝国（あるいは王国）」というイメージも、欧米人が捏造したものであり、日本においてもそのイメージが再生産され続けてきた。しかし実際のところは、唯一の皇帝（もしくは王）を頂点とする政治支配体制ではなく、それぞれに「王（トラトアニ）」を有するテノチティトラン、テツココ、トラコパンというメキシコ盆地の三都市同盟（エシュカン・トラトロヤン）が中心であった。しかも三都市同盟の支配構図は、いわゆる「アステカ王国」の成立以前から、メキシコ中央高原に存在していたのである［井上2008］。

高等学校新学習指導要領「世界史 A•B」の「2　内容」（平成21年3月）において、ヨーロッパ拡大以前のアメリカ大陸が世界史全体の観点から欠如しているのも問題である。「四大文明」・西洋中心の文明史観は脱構築されなければならない。メソアメリカ文明とアンデス文明は、旧大陸世界と交流することなく、「四大河文明」と同様に一次文明を独自に形成した。古代アメリカ文明の適切かつ十分な記述ぬきに、よりグローバルな「真の世界史」を提示することは難しい。

現行の学習指導要領から「細かな事象や高度な事項・事柄には深入りしないこと」が削除されており、より深い世界史教育が求められている。たとえば多々良は、現地で撮影した写真を利用して、古代アメリカ文明の深い理解を目指した授業を高校で実践している。青山は、2008年の茨城大学社会教育主事講座、水戸市で開催された社会科教育開発学会や未来を拓く教育フォーラムなどで教育委員会や教員に古代アメリカ文明の世界史的重要性に関する招待講演を行った。井上は、専修大学で実施された2009年度の教員免許更新講習において、アステカおよびマヤ・イメージの問題を取り上げ、講習に参加した高校教員と問題意識を共有しようと試みた。よりグローバ

ルで均整のとれた「真の世界史」を学ぶためには、コロンブス以前のアメリカ大陸の歴史の質量共に充実した教科書の記述が欠かせない。このことは、「四大文明」以外の世界各地の古代文明についても同様である。

3. マスコミ対応の経験・情報の共有

古代アメリカ学会として、個々の研究者として、マスコミ報道の改善・対応に対処していくためには、マスコミ対応についての経験や情報を共有することが重要といえる。テレビ番組を監修する場合は、監修者の不勉強から悪質なテレビ番組が制作されるという危険性がある。どんなに忙しくとも時間を惜しまずに良く勉強して徹底的に監修しなければならない。監修に充分な時間が与えられ、修正案にできる限り対応してもらえれば、番組は完成度の高いものになろう。また青山は、マヤ文明に関するテレビ番組に協力する場合、拙一般書［たとえば青山2005, 2007］を番組制作者にあらかじめ読んでもらうことにしている。一般書が研究者や一般読者だけでなく、番組制作者や他のマスコミ関係者にも読み込まれることによって、学術研究と一般社会のもつ知識の乖離が狭まることが期待されよう。

テレビ番組では資金が潤沢な場合には、時間をかけて綿密な制作作業を行えるが、そうでない場合は制作時間が限られている場合が多く、監修にあたって十分に時間が与えられない。ある程度番組のテーマや企画内容（たとえば特定の文明を「謎・神秘」と決め付けている）が決まっている場合は、大幅に変更することは困難であろう。また番組制作会社が放送局の下請けをする場合、現場には十分な権限が与えられていない。そのために研究者が問題点を指摘したとしても、大幅な変更は認められないという現実が存在する。

NHKでは、ドキュメンタリー番組には監修制度がないのが問題である。NHKの番組制作者から取材を受けた場合、研究者が「資料提供」したことが番組最後のテロップに流される。監修せずに提供された情報は、NHKであれ民放であれ、番組制作者のフィルターにかけられ、一般社会がわかりやすいように取捨選択・加工されてしまう。そして番組の編集権はあくまで放送局が有する。

悪質なテレビ番組への協力は断固として拒否すべきである。青山は、当時の日本テレビの人気番組『特命リサーチ200x』の「マヤの水晶ドクロ」（1999年）に出演依頼を受けたが拒否した。放送局の下請けの番組制作会社から「インタビュー」を申し込まれたのだが、実際には、用意された台本のせりふを読まされることになっていた。青山がどうしても許せなかったのは、「古代マヤ人が宇宙人と接触することによって英知を得て、文明を築きあげた」というくだりである。

青山は、「『マヤの水晶ドクロ』は捏造品である」と明言すべきだ、と番組制作会社に強く抗議した。しかし視聴率至上主義の番組制作者は、「それを言ってしまうと視聴者は見ませんから」と言い切ったのである。この手のテレビ番組は、マヤ文明やアンデス文明を未知・謎のままにしておきたいようで、科学的に解明されてしまうと困るのだろう。青山の「インタビュー」の箇所は、自称「マヤの水晶ドクロ専門家」のアメリカ人エセ科学者が全く異なった内容を話しているにもかかわらず、日本語の吹き替えで捏造されていた。多くの視聴者にとって宇宙人起源説やアトランティス伝説は、嘘だとわかっていても興味がわいてしまうのかもしれない。まさに、番組

制作者の思うつぼである。研究者は機会があればマスコミなどを通じて、いわゆる「超古代文明」による場違いな加工品「オーパーツ」が偽物であることを公的に訂正していかなければならない［青山2000］。

4. 提言

4.1. 高等学校世界史教科書の改善

第一に、学会として、個々の研究者として、短期・中期・長期的展望に立って高等学校世界史教科書におけるコロンブス以前のアメリカ大陸の記述を質量共に改善していくことが重要である。

短期・中期的展望（教科書会社）

①古代アメリカ学会の総会において会員から一任された古代アメリカ学会の役員会・学術情報普及検討WGが、高等学校世界史の主要な教科書・資料集の誤った事実や不適切な記述を検討すると共に、主要な教科書会社の高等学校世界史教科書作成の関係者（出版社・執筆者）と事前に直接意見交換して、どの程度修正が可能なのかを把握する。古代アメリカ学会事務局から各教科書会社にその提出の手順などを前もって説明しておいてから、正誤表・修正案を文章で送付する。送付した正誤表・修正案は、古代アメリカ学会の総会において報告する。

②古代アメリカ学会の総会において会員から一任された古代アメリカ学会の役員会・学術情報普及検討WGが、「謎と神秘の古代アメリカ観」を脱構築するために、メソアメリカの諸文明の節とアンデスの諸文明の節をそれぞれ記述した教科書の文案を執筆し、古代アメリカ学会事務局が各教科書会社に事前に十分に説明しておいてから提案する。提案する教科書の文案は、事前に古代アメリカ学会の総会において報告し、承認を得る。

③古代アメリカ学会の総会において会員から一任された古代アメリカ学会の役員会・学術情報普及検討WGが、世界史の教科書の検定委員、主要な教科書会社の世界史の教科書の西洋史執筆担当者・編集者、教科書製作者と粘り強く直接意見交換を行う。

④古代アメリカ学会の会員が、教科書執筆者である西洋史研究者と共同シンポジウムなどを開催して意見交換をする。さらに古代アメリカ学会の会員が、西洋史学者の間に古代アメリカに関する研究成果を広めるように努める。古代アメリカ学会の会員が西洋史関係の学会で積極的に発表し、たとえば史学会に論文抜き刷りを送付して『史学雑誌』の「回顧と展望」において古代アメリカに関する記述が充実するように努める。

長期的展望（文部科学省）

①古代アメリカの諸文明と旧大陸の「四大文明」を対等に位置付け、バランスの取れた「真の世界史」をきちんと教育する学習指導要領が策定されるように長期的な展望に立って、古代アメリカ学会として文部科学省に働きかける。

②古代アメリカ文明を質量共に十分に記述した教科書を究極的に作成させていく。

4.2. マスコミ報道の改善・対応

第二に、学会として、個々の研究者として、短期・中期・長期的展望に立って、「謎と神秘の古代アメリカ」という路線のマスコミ報道の改善・対応に対処していくことが重要である。

短期的・中期的展望（マスコミ対策）

①古代アメリカ学会の役員会･学術情報普及検討 WG が、古代アメリカに関する最近のテレビ番組を再検討し、古代アメリカ学会の会員の間でその問題点を共有し、考えるように働きかける。

②学会員がこれまで経験したマスコミ対応について情報を共有する。

中期的・長期的展望（マスコミ対策）

①日本社会に極めて大きな影響を与える、良質のテレビ番組や新聞報道に機会があれば、より積極的に関与して「歪められた」古代アメリカ文明観を公の場で訂正していく。

②放送局などマスコミに柔軟に対応するための研究者マニュアルあるいは指針を古代アメリカ学会として作成する。

4.3. 研究成果の一般社会への発信と還元

第三に、学会として、個々の研究者として、短期・中期・長期的展望に立って古代アメリカの研究成果を積極的に一般社会に発信し、還元していくことが重要である。

短期的・中期的展望（一般社会）

①古代アメリカに興味・関心を抱く一般市民、大学生、青少年（小・中・高生を含む）をより多く獲得し、研究の裾野を広げるために、学会主催の公開シンポジウムを開催し続ける。また、一般向けのわかりやすい書物を出版するよう努力する［最近ではたとえば青山2007：多々良2008：増田・青山2009］。

②学会員が、ウェブ上で正確かつ新しい情報を発信する。たとえばウィキペディアのような影響力の強い媒体の執筆・修正を働きかけていくことも効果的といえよう。

③古代アメリカ学会のホームページにおいて、会員のホームページやブログのポータルサイトを提供する。

中期的・長期的展望（一般社会）

①学会主催の公開シンポジウムを、たとえば科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「研究成果公開発表」(B)の助成を受けて開催する。

②世界史教科書を執筆する西洋史研究者が所属する他学会、旧大陸の古代文明を研究する他学会などと共同で公開シンポジウムを開催する。

③学会主催の公開シンポジウムへの中学・高等学校教員の積極的な参加を呼びかける。

5. おわりに

古代アメリカに関する研究成果・学術情報が日本社会に広く普及するためには、課題が山積している。しかし、何もしないで指を銜えて見ているわけにはいかない。短期、中期、長期的展望に立って、今できることから実行に移していくべきである。古代アメリカの研究者は、優れた研究成果を生み出し続けて、国内だけでなく、諸外国で学術論文として出版すると共に、一般書や公開講演会・シンポジウムなどを通じて日本社会にわかりやすく還元し続け、学術研究と一般社会のもつ知識の乖離を狭める努力をしなければならない。そして国内外で社会的認知と高い評価を得て、日本政府や一般社会が、古代アメリカ研究の投資価値をより明確に認識するようにして

いく必要がある。ちなみに第1回古代アメリカ学会主催公開シンポジウム「マヤ文明とアンデス文明の調査と国際協力」は、2009年6月21日にたばこと塩の博物館で開催された[2]。

古代アメリカ学会や会員の発言・提言が、誰のため（文部科学省、教科書会社、一般社会）なのか、常に念頭に置かなければならない。古代アメリカ学会や会員の「エゴ」になっては無視されるだけだが、大学入試改革の動きなどについても視野に入れながら、古代アメリカ文明が歴史教育の周縁に追い出されないように予防線を張っていく粘り強い作業も必要であろう。筆者らが生きている間、あるいは次の世代に旧大陸とアメリカ大陸の古代文明を対等に位置付けて、よりグローバルで均整のとれた「真の世界史」に近づけていきたいと考える。

教科書の内容を改めるだけでは難しい面もある。多々良は高校教員対象の雑誌［多々良2001, 2005］や教科研究会[3]で、古代アメリカ文明の理解を進めるべく教科書に記されていない情報を提供したり、誤った記述を訂正したりしている。にもかかわらず、それらは単なる話題づくりにとどまることが多く、授業に活かされている様子はあまりうかがえない。公開シンポジウムなどに教員を参加させる方法を考え、彼らの意識を変えて授業を実践しなければ、教科書の内容をいくら改善しても「真の世界史」を浸透させることは簡単ではない。

日本におけるマヤ・イメージの流通を、ピエール・ブルデューが名付けた「ハビトゥス」の観点から検証した吉田［2006:16］は、「今日日本において、流通させるべき商品としての『マヤ』を製造しているのはいまだに、古い歴史叙述スタイルの中でマヤ＝インカ思考回路を植えつけられたかつての高校生たち」だと述べている。個人の内部に一旦ハビトゥス化してしまった思考回路を矯正するのは容易ではないだろう。しかし、これから高校生になる少年少女がもっているマヤ・イメージはいまだハビトゥスとして身体化された知識ではないはずである。吉田の調査が示唆するように、そうした知識はある程度学校における世界史教育によって形成されている。であるとすれば、ハビトゥスとしてのマヤ・イメージの再生産を断ち切るためには、まずは学校の歴史教科書の内容を改善していくことが必要だろう。少なくとも、古代アメリカ文明に関してステレオタイプ化された形で流通しているイメージや情報を批判的に受け止めることのできる教育方法が追求されねばならない。

このような問題を解決していくためにも、長期的な展望に立って、古代アメリカ文明を質量共に十分に記述した教科書を作成する新学習指導要領が策定されるように、学会として、研究者として、辛抱強く関わっていく必要がある。「謎」、「神秘」や「ロマン」といった言葉は、一般社会が要求し続ける古代文明の消費において不可避であり、むしろ古代文明に興味・関心をもたせる上では効果的な場合さえある。近年の「世界遺産ブーム」も関心をよびおこすきっかけとなり得る［禪野・井上・ナカガワ・平田2010］。しかし何よりも重要なのは、より正確な古代アメリカの情報にたどり着けるような機会と道筋を、一般社会に広く通用する言葉と語りで数多く提供していくことである。本稿を手がかりとして、古代アメリカの学術情報の普及および「謎と神秘の古代アメリカ観」の脱構築にむけて活発な議論・活動が古代アメリカ学会の会員の間だけでなく、日本社会において広く行われていくことを強く期待すると共に、筆者一同、今後とも積極的に関与していく所存である。

注

1) WG研究会では、13時から17時まで、青山和夫「古代アメリカ・オリエンタリズムの脱構築にむけて」、吉田栄人「古代アメリカ文明に関する情報で一体何が問題なのか」、坂井正人「古代アメリカ研究の発展のために―どのようにマスコミと付き合っていけばよいか」、井上幸孝「世界史教育・西洋史研究と古代アメリカ」、多々良穣「高校世界史の教科書問題と学習指導要領」の研究発表・議論を行った。本稿は、平成20–25年度科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（代表青山和夫）と平成20–25年度科学研究費補助金基盤研究（B）「マヤ文明の政治経済組織の通時的変化に関する基礎的研究」（代表青山和夫）の成果の一部である。関雄二先生から、WGの議論に関して極めて有益かつ建設的なコメントをいただいた。記して感謝申し上げます。

2) 古代アメリカ学会会員の研究成果を日本社会に広く還元し、古代アメリカのファン・裾野を広げるために、一般市民を対象に、青年海外協力隊での経験や社会開発などを実践している研究者の体験を中心とする公開シンポジウムを開催した。青山の司会進行のもと、大貫良夫「古代アンデス文明の研究と国際協力」、長谷川悦夫「ホンジュラスにおけるマヤ文明調査・国際協力」、青山和夫「ホンジュラスとグアテマラにおけるマヤ文明調査・国際協力」の発表の後に、質問用紙の質問に答える形でパネル・ディスカッションを行った。

3) 多々良は、平成14年度宮城県高等学校社会科教育研究会（2002年）や全国歴史教育研究協議会第48回研究大会（2007年）などで、古代マヤ文明の授業実践方法に関する発表を行った。

引用文献

青山和夫

2000 「新しい古代マヤ文明観から異文化理解を考える：“マヤの水晶ドクロ”のいかさま」『科学』70（3）：170–174.

2005 『古代マヤ　石器の都市文明』京都大学学術出版会.

2007 『古代メソアメリカ文明　マヤ・テオティワカン・アステカ』講談社選書メチエ.

2008a「『真の世界史』を学ぶ：マヤ文明は洗練された『究極の石器の都市文明』」『日本学士院ニュースレター』1:7.

2008b「マヤ文明研究と『真の世界史』」『チャスキ』37: 6–14.

2009a「外国考古学の動向：アンデスとメソアメリカ」『日本考古学年報（2007年度版）』60:93–101. 日本考古学協会.

2009b「マヤ文明における太陽と暦：『四大文明』だけではない『真の世界史』のために」『科学』79（12）：92–95. 岩波書店.

井上幸孝

2008 「メキシコ史における先住民概念についての一考察―征服と植民地時代の事例から―」『専修人文論集』83:81–107.

禪野美帆・井上幸孝・ナカガワ、マルガリータ・平田和重

2010 『初級～中級スペイン語　世界遺産を訪ねて（Conociendo el Patrimonio de la Humanidad）』. 朝日出版社.

多々良穣

2001 「第五の古代文明」『歴史と地理』544:16–26. 山川出版社.

2005 「高校生のマヤ・イメージとマヤ文明の授業実践」『歴史と地理』589:17–25. 山川出版社.

2008 『ようこそマヤ文明へ～マヤ文明へのやさしいアプローチ～』文芸社.

増田義郎・青山和夫

2009 『世界歴史の旅　古代アメリカ文明　アステカ・マヤ・インカ』山川出版社.

吉田栄人
2006 「日本におけるマヤ・イメージの消費構造—高校生・大学生・放送大学生に対するアンケート調査からの一考察—」『古代アメリカ』9:1–23.